

平成 2 0 年度

《第 1 回》

# 国 語

時間 5 0 分， 1 0 0 点満点

## 受験上の注意

1. 解答用紙には、受験番号・氏名を記入してください。
2. 解答は、解答用紙の所定のところに記入してください。記入方法を誤ると得点になりません。
3. 試験終了の合図とともに、解答用紙・問題用紙とも提出してください。

郁文館中学校

① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。〈各段落の最初にある①～⑦は段落番号を示します。〉

① 日本語では、「子どもが申しますには……」と「子どもが言いますには……」とで、はっきり違う。「子どもが申しますには……」という言葉から、人々は、母親が「と話している場面を想像する。」「子どもが言いますには……」と母親が「と話しているなら、その母親は言葉に対する心づかいが細かいということになる。しかし、この「申す」と「言う」の相違にぴったり当たる言い方を、英語・ドイツ語に求めても、「それを引き出すことはできない。英語・ドイツ語には、日本語にあるこの区別がなく、「申す」も「言う」も一つの単語で表現する。それは、英語・ドイツ語の社会に、「申す」と「言う」に当たる観念の区別がないからである。

② もちろん（１）の方がいつも言葉の数が多く、（２）の方がいつも少ないというのではない。（３）にあつて、（４）に欠けている言葉もある。例えば、英語には、「自然」という言葉がある。ネイチュア nature がそれである。このネイチュアに当たる言葉は、日本語では「自然」という他、何も言いようがない。中国語やヨーロッパ語からかり入れたものではない。もともとの日本語をヤマト言葉と呼べば、ヤマト言葉に「自然」を求めても、それは見当たらない。なぜ、ヤマト言葉に「自然」を発見できないのか。

③ それは、古代の日本人が、「自然」を人間に対立する一つの物として、対象として捉えていなかったからであろうと思う。自分に対立する一つの物として、意識のうちに確立していなかった「自然」が、一つの名前を持たずに終わったのは当然ではなからうか。「申す」と「言う」の観念の区別がない所では、その言葉の区別がない。「自然」が一つの対象として意識に確立されなければ、そこにはその名前がない。

④ ヨーロッパ人にとって、自然は、人間がそれに働きかけ、変革し、破壊し、人間に役立つものを作り出す素材である。山の形を変えて水をため、へ a 道路をつけて人間のイオウライに役立てる。自分の住んでいる地球を動かすにはどのくらいの力があるかを計算し、この地球から脱け出して、その回りを巡ろうと考えるその根本には、地球を自分に対立する一つの物と見る考えがはっきりと存在している。

⑤ このごろは、日本でもヨーロッパにならって川の水をせき止めてミズウミを作り、港湾を埋め立てて、それを大いに利用しようとする風が起こっている。それにもかかわらず、基本的には、日本人は自然を、人間に対立する物、利用すべき対象と見ていない。むしろ、自然は、人間がそこに溶け込む所である。自分と自然との間に、はっきりしたサカイがなく、人間はいつの間にか自然の中から出て来て、いつの間にか自然の中に帰って行く。そういうもの、それが「自然」だと思っているのではなからうか。

⑥ 日本人は自然を徹底的に人間のために利用しようとするよりも、自分の生活の中に自然を持ち込んでいる。石で堂々とした家を建てるよりも、自然の木を使い、自然の土を使って家を建てる。建てた家の中に、小さな箱庭のような庭を作り、自然をそこに移し入れる。いつも自然と共にあること、これが日本人の自然に対する対し方である。自然と共にいるというよりも、「自然」と溶け合っている、「自然」に対して自と他という、へ b 区別を持たない。

⑦若いうちには、いろいろな活動をした人でも、日本人は年をとると、山の麓ふもとの静かな所に小屋を建て、そこにへ。へ。生きたいと願う人が少なくない。人々はそれを、よいことのように思う。「隠棲する」という言葉がある。人間が、自然の風景——大きな林、水の流れ、広々とした草原、そこに立つ一本の大樹——その中に自分を持って行き、その自然のオフウブツとなつて生きること、それが隠棲である。それは日本人が「自然」と「人生」に対して持つ、根深いところさしの一つの姿であると言えるように思う。

⑧これには他のさまざまな原因もあるう。しかし私は、これを、言葉の問題に引きつけて考えている。

(A) 日本人が自然を利用の対象と見ず、自然と人間との間を明瞭めいりょうに分けずに、溶け合おうとすること。それら二千年前のあり方が、長い歴史の時代を通じて日本人の間に生きており、今日も依然いぜんとして尾を引いて、そのような姿をとって現われるもののように私は見る。

(大野 晋『日本語の年輪』より)

語注

※観念：ある物事についての考え方。

※箱庭：浅い箱に山や川のけしきなどを小さく作ったもの。

※明瞭：はつきりしていること。

問一 二重線部ア～オのカタカナを漢字に直して丁寧に書きなさい。

問二 ①段落の《 》には同じ言葉が入ります。次のア～エのどの言葉を入れると文意が完成しますか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 子ども    イ 父親    ウ 子どもの友だち    エ 先生

問三 傍線部1「それ」は何を指していますか。文中から探し、十字以内で書き抜いて答えなさい。

問四 傍線部2「英語・ドイツ語の社会に、『申す』と『言う』に当たる観念の区別がないからである」とありますが、日本語ではどのように「申す」と「言う」の区別がされていますか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「申す」は昔の言い方、「言う」は現代風の言い方。

イ 「申す」は敬語表現で用いる言い方、「言う」は敬意をふくまない言い方。

ウ 「申す」は書き言葉で使用する言い方、「言う」は話し言葉で使用する言い方。

エ 「申す」は丁寧な言い方、「言う」はらんぼうな言い方。

問五 (1) (2) (3) (4) には、「日本語」・「ヨーロッパ語」のどちらかの語がそれぞれ入りま

ア	ヨーロッパ語	日本語	日本語	ヨーロッパ語
イ	日本語	ヨーロッパ語	ヨーロッパ語	日本語
ウ	ヨーロッパ語	日本語	ヨーロッパ語	日本語
エ	日本語	ヨーロッパ語	日本語	ヨーロッパ語

問六 文中から次の一段落が脱落してしまいました。もどすべき場所を探し、その直前の段落番号を答えなさい。

「自然」が「人間」に対立する一つの物として捉えられなかったのは、日本民族においては、深い遠い由来を持つ事柄である。だから、「自然」という中国語を学んだ後でも、長い間、日本人は「自然」を一つの物と見る考え方を身につけずに来た。それは、単に遠い歴史の時代だけでなく、現代の日本人の間でも、根強いことのように見える。

問七 傍線部3「そこにはその名前がない」とありますが、筆者はどのようなときに物に名前がつくと考えていますか。文中の言葉を上手に使って「〜とき。」という形で、「とき。」を含めて二十文字以内（句読点も字数に数えます）で答えなさい。

問八 波線部1「変革し」、2「素材である」の主語を探し、それぞれ一文節で答えなさい。

問九 傍線部4「基本的には、日本人は自然を、人間に対立する物、利用すべき対象と見ていない」とありますが、日本人がどのように自然と接しているのかが具体的に述べられている、続きの二文を文中から探し、その最初の五字を書き抜いて答えなさい。

問十 へ へ部 a・b・cに入る言葉を、次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。  
ア ひっそりと イ あつかりと ウ はっきりした エ しっかりした

問十一 へ A へにあてはまる文を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本語のヤマト言葉に「自然」という単語がないこと。
- イ 日本語はヨーロッパ語よりも複雑であること。
- ウ ヤマト言葉には「申す」という単語が存在していること。
- エ 日本では「自然」という言葉の意味が定まっていないこと。

問十二 次のそれぞれの文から、本文の内容に合わないものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人は自然を自分と対立する対象と見ていない。
- イ ヨーロッパ語は日本語ほど細やかな気持ちを表現する単語を持たない。
- ウ 日本人は自分たちの都合に合わせて自然を支配している。
- エ ヨーロッパ人は自然を人間と対立する対象と見ていない。
- オ 日本人は自然と溶け合い、共存して生活している。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【 龍次のあとについてきた子犬を飼うことにした船場家。龍次は、子犬に自分のあとについてきたから「ツイ」という名前をつけ、家族みんなでたいへんかわいがりました。ツイとの楽しい日々が続いていたある日、ツイの本当の飼い主が見つかり、ツイは新垣さんの家に帰っていきました。 】

塾から帰ってきた勘太郎は、

「ツイ、またにげたみたいだよ。」

と、庭から大声を上げました。

「ちがうんだよ、じつは。」

と、龍次がきょう起きたことを話すと、

「うそだろーっ！」

と、さげんだかと思うと、わーんつと泣きました。なみだをぼろぼろこぼしました。

それで、初めて龍次の目からもなみだがあふれてきました。（A）がしめつけられるようにいたみました。わーんつと声をあげて、ひつくひつくひつくとしやくり上げました。

「さびしいよお！えーん。」

と、勘太郎が言い、龍次も、

「ツイー！えーん。」

と、言いました。ふたりででき合って、大声で泣きじやくりました。

台所から、お母さんが低く声をおしころして泣いている声が聞こえてきました。

「泣くなお母さん、お母さん泣くな」

と、龍次は泣きながら心の中で言いました。

泣きやんだ勘太郎はピアノのふたをあけて、小さい音でショパンの「子犬のワルツ」をひきました。ころころこところがる音のつぶつぶを聞いていると、龍次はツイがころげまわっているすがたが見えてくるのでした。なみだが止まりませんでした。

そのあと、勘太郎は龍次にツイが琉球犬というめずらしい種類の犬だったことを聞いて、

「ああ……」

と、ためいきをつきました。そして、

「見たことなかったから雑種だときめつけてたよ。オレたちったら、知ってることしか知らないね。」

と、言いました。ほんとうにそうだと龍次は思いました。勘ちゃんがこんなにしよんぼりしているのを龍次は初めて見ました。

歯をみがきながら、龍次はエンガワから犬小屋を見ました。勘太郎がしめわすれたピアノのふたをそつととじました。

龍次は勘太郎のことを前より好きになったかもしれないと思いました。台所で泣いていたお母さんのことも。お父さんが帰ってきて、しばらくして、寝室のドアをあけてしめる音がしました。

「泣くなツイ、ツイ泣くな。ツイ、ぼくがいなくても平気だよね。」

龍次は遠くのツイに話しかけました。ツイの声も寝言も寝息も聞こえない、静かな静かな夜がふけていきました。連休の一日目、船場家の人々は志木さんといっしょにお父さんのワゴン車で、新垣さんとの約束どおり、植木町に行きました。勘太郎と龍次は植木町は初めてでした。赤いもみじでそまった奥山のトンネルをぬけて、黄色いイチヨウ並木がつづく国道から旧イカイドウにそれてしばらく行くと、道の両側に植木が植わっていて、それがだんだんふえていきます。新垣さんの家は植木にかこまれてたっていました。

勘太郎と龍次が（B）ツイをさがしていると、お母さんと話していた新垣さんの奥さんが、  
「あつ、来た来た。」と、むこうの背の高い木を指さすと、木の間をトゥラコと女の子が（C）に走ってきました。

トゥラコはつながれていませんでした。女の子が、

「こんにちはー。」

と、につこりしました。

「こんにちは。」

と、船場家の三人も言いました。

「瑠璃です。」

と、新垣さんのおばさんが言いました。

目の大きなかわいい子だなと龍次は（D）しました。沖縄出身のタレントにしていると思いました。トゥラコはあの青い目でニコニコ笑っています。龍次の足にぶつかって、それから勘太郎とお母さんにぶつかって、ワンといつて（E）まわっています。トゥラコも瑠璃ちゃんも（F）している、と龍次は思いました。

「あ、ぼく龍次です。」  
と、龍次は言いました。

「瑠璃です。トウラコのこと、いろいろすみませんでした。」  
と、女の子が言いました。

「ぼく、龍次の兄の勘太郎です。」  
と、勘太郎。

「こんにちは。あっちにひろいところがあるんで、あっちに行きませんか？」

と、瑠璃ちゃん。それで、三人とトウラコ、あの高い木の林をかけぬけて、なだらかな小川が流れている手前の草地に出ました。

「ああ、いい気持ち。」

と、言つて瑠璃ちゃんが草の上にあおむけに寝ころぶので、ふたりもそうしました。色のこい、高い青空が広がります。

「あのね、龍次さん、うちに帰ってきた日の夜にトウラコは一晚中泣いてたんですよ。悲しい声で。」

「あ、そうなんですか。」

と、龍次。

「やっぱり、さびしかったのかなあ、こいつも。」

と、勘太郎。

「あたりまえですよ。だって、この子、わたしといた時間よりも船場さんとこにいた時間のほうが長いんだもの。うちにいたところはまだよく夜に泣いたから、それがまだ直ってないのかなと思っただけで、次の日から泣かなくなったの。」

「そうか、えらいぞ、トウラコ。」

と、龍次はトウラコの頭をなでました。

「じつはね、あの日の夜はぼくも泣いたんです。ぼくも龍次も母親も父親も。」

と、勘太郎。

「え、お父さんも？」

と、龍次。

「そうだよ。オレ、水飲みにおりたとき見ちやつたんだ。お父さん、リビングでアルバム見ながら、ひとりで泣いてた。」

「そうか、みんな泣いたんだね。」

「それは、うちもそう。いなくなつたとき、みんな泣いた。わたしの友だちも。」

と、瑠璃ちゃん。大吾くんも泣いたなあ。ツイはツイじゃないって龍次が話したとき。

「泣かせる犬だよな、こいつ。」

と、勘太郎。はあーつて、三人息をはいて、それから息をすいこんで、

「よかったのかな、これで。」

と、瑠璃ちゃんが言つて、

「よかったんだよ。」

と、勘太郎と龍次が同時に言つて、トウラコがワンと言つたのでした。

それから、新垣さんが用意してくれたバーベキューを食べるまでの間、三人と一匹はそのへんで遊びました。

勘ちゃんと瑠璃ちゃんが川遊びの道具を取りにいつて、トウラコとふたりつきりになる時間が少しだけあったので、龍次は小さな声で、

「ツイ。」

と、よんでみました。ワンと小さな声でトウラコが返事をしました。

「いいか、もう泣くなよ。泣くなツイ、ツイ泣くな。泣くなツイ、ツイ泣くな……。」

と、なつかしい子守歌を歌うように、龍次はトウラコの背中に手をあててゆっくりなでました。トウラコはごろんと草の上にねころんで、目をつぶりました。ほんの短い時間が、すごく長く感じられました。小川のせせらぎの音。さらさらと木の葉が風を受ける音。空で小鳥の鳴き声。ちよっとむこうのしげみで、虫か何かがチチチチチと鳴きました。

「トウラコ、ぼくについてきてくれてありがとう。ツイつてよぶのはこれが最後だよ。おまえはトウラコだ。いい名前だ。ツイっていう名前はわすれろ。いいか、最後に一回だけ言うぞ。これが最後だぞ。」  
ワンとトウラコが言いました。

「ツイ！」

ワンともう一度、トウラコが言いました。

小川の流れを見つめながらなんですわっている龍次とトウラコ。

問一 波線部ア・イのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ( ) 部Aに適語(漢字一字)を入れて「龍次の心情」を表す表現を完成させなさい。

問三 ( ) 部B～Fそれぞれに入れるのに、もっともふさわしいものを次のア～カの中から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

ア キラキラ    イ メソメソ    ウ キヨロキヨロ    エ ジグザグ    オ ドキドキ    カ クルクル

問四 傍線部1「初めて龍次の目からもなみだがあふれてきました」とありますが、この時の龍次はどんな気持ちだったと考えられますか。もっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 自分ほどツイをかわいがっていなかったはずの勘太郎に先に泣き出されて悔しい気持ち。  
イ たいして悲しくなかったのに勘太郎に泣かれ、自分も泣かなきゃいけないという気持ち。  
ウ ツイが去った悲しみに耐えていたが、勘太郎の泣き声でもう我慢できないという気持ち。  
エ ツイが去ったショックでボーッとしていたが、悲しいときは泣くことに気づいた気持ち。

問五 傍線部2「知ってることしか知らないね」とありますが、どういう意味ですか。その説明として、もっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 犬に関する知識が乏しい自分たちは飼い主の資格がない。  
イ 人間は持っている知識以上のことは判断はできないのだ。  
ウ 限られた知識しかないのだから知らなくても仕方がない。  
エ 世の中のことをなんでも知っていると思いがっている。

問六 傍線部3「トゥラコはあの青い目でニコニコ笑っています」とありますが、ここで用いられている表現技法をなんと言いますか。その技法名を漢字三字で答えなさい。

問七 傍線部4「泣かせる犬だよな、こいつ」とありますが、なぜ、そう言えるのですか。その理由としてもっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア トウラコは、船場家や新垣家の人や多くの人たちにさんざん迷惑を掛けている「お騒がせ犬」だから。  
イ トウラコは、誰からもかわいがられ愛される犬であり、いなくなったことで多くの人を泣かせたから。  
ウ トウラコは、自分の家も分からなくなってしまうくらい方向オンチでいろいろな家で嫌われてるから。  
エ トウラコは、誰彼かまわずついて行ってしまう、犬の嫌いな人にイヤな思いをさせてしまう犬だから。

問八 傍線部5「トゥラコはごろんと草の上にねころんで、目をつぶりました」とありますが、この時のトゥラコはどんな気持ちでしたか。もっともふさわしいものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 久しぶりに鎖につながれず自由に走れて満足だという気持ち。  
イ 瑠璃ではなく、男の子たちと遊んで疲れたなあという気持ち。  
ウ かつての飼い主であった龍次に会えて心から安心した気持ち。  
エ 子どもたちと遊ぶことに疲れて静かに寝たいという気持ち。

問九 傍線部6「これが最後だぞ」とありますが、この時の龍次はどんな気持ちでしたか。「自分」という語を使って二十五字以内で書きなさい。

問十 この物語で描かれている龍次とツイ(トゥラコ)の関係の説明として、もっともふさわしいものを次のア～オの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 兄弟のような関係    イ 親子のような関係    ウ 親友同士の関係  
エ 瑠璃をめぐるライバル関係    オ 船場家と新垣家を結ぶ関係